
孤独な少女の日常

神崎泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な少女の日常

【Nコード】

N2991E

【作者名】

神崎泉

【あらすじ】

幸せな日々。少女はそんな毎日がずっと続くと何の疑いもなく思っていた…しかし、両親が死に、一気に不幸のどん底に突き落とされた少女から見た世界はあまりにも暗く、嘘にまみれた世界だった。何も信じられない、全てが偽りの世界…少女はそんな世界に嫌気がさし、見知らぬ土地に独りで引っ越し新たな生活を始めた。

第一話 世界崩壊の日（前書き）

この作品はフィクションです。

内容としては、少女の視点から書いているため少女の感情が多く書かれており、読みにくい点が多いと思いますがご了承ください。

第一話 世界崩壊の日

海が見える綺麗な町並み。

優しい両親、仲の良い友達。

私の毎日に足りないモノ…

そんなものなんか無いと思ってた。

だけど、幸せなんて不安定なもの、すぐに消え行くモノだと言ったことを私は忘れていた…

世界消滅の日…

「まだ高校一年生なのにね…。」

「親族の方も居ないらしいわよ。」

「あら、どうするのかしら？」

おばさんたちの小声で交わされる会話が右耳から入り左耳へと通り抜けて行く。

まるで人ごとの様に交わされる会話はちゃんと本人の耳にも聞こえているのだ。

こんな場所で言わなくても良いのに…

私はぼんやりとそう思った。

世界は急速に簡単に崩壊していった。

そう、両親が死んだのだ。

居眠り運転をしていたトラックと正面衝突し、即死だった…

私の幸せだった日々はすぐに崩れてしまったのだ。

両親が死んだ…

頭では分かっているけど現実味がない…

水の中に居るときのように世界が歪んで見える、脳に酸素が回っていないのかも知れない…

だって、ほら。視界が水でぼやけて見える…

このまま私は溺死するんだ…

そう、父さんと母さんの元へ逝くんだけ――

だけど、私が死ぬことはない……

現実にはきちんと酸素が配給されているし、視界がぼやけるのは涙のせいだ。

分かってる……分かってるけど認めたくない……

認めてしまったら本当に父さんも母さんも居なくなる気がした。

確かにもうこの世には存在はしないのだが生きていると信じたいのだ。

「……」

ふつと現実に戻るとお坊さんがお経を唱えながら時折木魚を叩いていて、人々は黒い服に身を包み暗い表情をしていた。

私は何をしていただろう。

目の前には沢山の菊の花とフルーツが置かれ、中央に眩しいくらいに幸せそうに微笑む父さんと母さん。

……ああ、父さんと母さんのお葬式の最中だった。

丁度そんなことを考えている時、お坊さんのお経が終わり私の挨拶の番になった。

こういう時、残された親族はハンカチを片手に鼻を嚙りながら死んだ人との思い出話をして、号泣するのだろうか…

実際人が死ぬとまったく実感がわからないのだ。

マイクの前に立たされたが言うことはなく、涙も出てこない。

端から見ればかなり冷めた子だと思われるのだろう。

「…。父と母は死んでいません。私は信じません。」

私はそれだけを言っただけでマイクの前から元の席に戻った。

式の会場は騒然とし、おばさん達はまた隣のおばさんと囁き、友達も怪訝な表情で私を見つめた。

そんな顔されても私は私なのだ。

思っていることを言っただけで何が悪い。

私は周りの痛い視線を無視して父さんと母さんの写真を見つめた。

昨日まで話をしていたんだ。

ご飯だっけと一緒に食べたし…夏休み一緒に初めての外国に行こうかって約束したんだ。

父さんも母さんも約束はいつだって守ってくれた。

きつと帰ってくる。

どんなに遠くに居ても…

みんなが私に挨拶をして父さんと母さんに線香を上げ、棺桶から2人の顔をのぞく。

私はまだ2人の顔を見ていない。

みんなが線香を上げ終え、私が最後に線香を上げた。

そして私は震える足で、二つの棺桶が並ぶ方へ歩いた。

棺桶の中には写真とは全然違う面影もない人が2人寝そべっていた。

体には至る所に傷がある。

私はここに来て初めて涙を流した。

ああ、死んでしまったのだと実感した。

2人が霊柩車に乗って火葬場に向かう。

私もタクシーに乗って霊柩車の後に続いた。

霊柩車が通ると周りの車は道を開けた。

そして哀れみと好奇心の目で霊柩車を見つめるのだ。

ああ、誰かが死んだんだ…可哀想に…でも誰が死んだのだろう。

こんなことを思っているに違いない。

私はそんな風にしか私や父さんや母さんを見てくれない人々に怒りを覚え始めていた。

火葬場に着き、2人は煙となって高く高く、空へと昇って逝った。

残ったのは2人分の骨と私だけ。

私はこうして独りになってしまった。

葬式も終わり独り部屋に取り残された。

友達も声をかけてくれたが私は反応すらなかった。

みんな私を哀れんでいるのだ。

心の中ではあざ笑っているのだ…

みんな心の中では…

こうして私は信じると言うことが出来なくなっていた。

月日は経って2人もお墓に埋葬された。

父さんと母さんが日の光を見ることはもうないのだ。

こうして私は独りになった。

幸せだった日々は一変し、不幸な毎日が待っていた。

友達の哀れみの視線と慰めの言葉。

近所の人の労り…

全てがみんなの好意だと分かっていた。

だが、人を信じる事が出来なくなった私にとってそれはただバカにされているように感じた。

第一話 世界崩壊の日（後書き）

初めまして、神崎泉です。

第一話書き終えました。

どうだったでしょうか？

出だしから暗いですね。

しかも、凄く小説書くのは下手なので…すみません。

感情描写が多すぎたと自分でも思います。

まあ、しかし始めは両親が少女にとっていかに大切な存在だったのかはつきりさせたかったので…

にしても多かったですね…

しかも例えとかが下手ですね、点とかも少ないし…

…まあ、こんな感じになっておりますが、一様連載作品にする予定でいるので続きも読んで下さると嬉しく思います。

第二話 新たな住処（前書き）

両親を失い、人を信じることを止めた少女の話。

第二作目。

第二話 新たな住処

周りが信じられない。

いや、信じたくない…

もう、これ以上大切な人を失いたくない。

だけど人は死んで行くものなのだ…。

それならいっそ…大切な人なんか要らない。

新たな住処

両親が死に、相変わらず学校に通う。

もう、両親が居ない毎日にも慣れてきた。

日に日に両親の面影は私の中から消えているのだ。

だが、大きな悲しみは時間がたち穴となって私の心に残った。

黒く、深く、重い闇は全てを飲み込もうと大口を開けて待っているのだ。

学校に行っても友達は遠慮気味で、私を労るようになった。

しかし、私にはそんな些細な変化ですら悲しかった。

いつも通りに接してくれたら、父さんと母さんの居てくれている気になれたのかもしれない。

だが、今更普通に戻れるはずがない。

私はそんな毎日に嫌気がさした。

もう、この町には私には辛すぎるのだ。

この綺麗な町並みも、友達も、近所のおばさんの、隣の家の子も…

全てが父さんと母さんの思い出を、そう幸せな日々を思い返させるのだ。

私は引っ越しをすることにした。

お金は両親の慰謝料や財産が残っていたので有り余っていた。

それに、独り暮らしで身よりもないため誰にも迷惑はかからない。

私は見知らぬ遠くの町へ引っ越すことにした。

美しい自然もなく、近所の人との関係も気にしないですむ場所へ…

家族3人で暮らしてきた一軒家。

お世辞にも大きいとは言えない普通の家だけど…

此処には私と父さんと母さんとの思い出が沢山詰まっている。

しかし、もう私には必要はないのだ。

私はこの土地を売り払うことにしたがそんなにすぐに飼い主は決まらず、荷物をまとめて引っ越しをし、家の買い手を待つことにした。

荷物は少なく、処分するものが多い。

父さんの机、母さんの椅子。

全てはこれから無に帰るのだ。

さようなら、さようなら。

思い出の詰まった家具、家、全て…

こうして私はこの家を出た。

新しい私の住処。

騒々しく人々が行き交い、転ぶ人が居ても誰も手を差し伸べない。

車は迷惑を考えず廃棄ガスをまき散らして走り、人は歩きながらも平気で煙草を吸っている。

前の町ではあり得なかった光景。

だけど、私を誰一人と見ていない感覚が私には心地よかった。

そして、そんな町で住むことになったのだが…

住み始める所は、騒々しい中央通りから離れ、暗く狭い入り組んだ裏路地を少し行ったところにある少し胡散臭いマンションだ。

高校はどうしようかとも思ったが金は有り余っている。と言うことは学校に行って働く必要もないのだ。

それに、学校や会社だと自ずと人間と関わりを持たないといけなくなるのだ。

なので私はその日から暇な毎日を過ごし行くことになった。

第二話 新たな住処（後書き）

第二話終了しました。

相変わらず暗く、心理描写多めで書かせて頂きました。

次回からはやっと前書きと言っか…設定説明と言っかが終わり、まあ、本編と言っか。

俺は本当に書きたかった話が始まります。

良ければ是非次回作も読んで下さい。

第三話 l a s t s h o w N o . 1 (前書き)

前回の作品“新たな住処”の続編です。

今回のこの作品は第3作品と言うことでまだ、一話と二話を読んでいない方は、“第一話世界の崩壊”と“第二話新たな住処”も読んで頂けたら嬉しく思います。

第三話 l a s t s h o w N o . 1

新たな街に移り住み、人と馴れ合わない毎日が続いた。

何をするでもなく、部屋に籠もって本を読みふけた。

ご飯はお腹が減ったら食べる程度で食欲もあまりない。

しかし、もうすぐ食料が底をつきそうだ。

と、言うわけでこの日は買い出しに出かけた。

外に出るとやはり街は騒がしく、空も排気ガスでなのか、曇っているだけなのか灰色だった。

人は周りを見ることなく忙しく歩き、人間の繋がりが感じられない…。

誰も私を気にもかけず目の前を通り過ぎて行く…。

私は人混みの中を一人で進んで行った。

引越してからずっと引き籠もり状態だったせいで、まったくこの街の地形が分からない。

人混みの流れに身を任せてフラフラ街を歩いた。

すると、一軒の店が目にとまった。

周りの白を基調とした店とは打って変わって、漆黒の外壁に重々しい入りにくい雰囲気…

本来食料を調達しにきたのだが、知らぬ間にその店に足が向かっていた。

店の看板には“last show”とあり、下に小さく end of the storyともあった。

“last show”…最後のショー…。

その下にあるのは… end of the story 物語の終わり…

だが、店頭には年代物の外国のものだと思われるランプとソファーが飾ってあった。

名前の意味が全く分からない…

しかし、よく考えると家から家具は何も持ってこなかったなーっと思っただ。

家具には両親との思い出が多く残りすぎていたので全てを吹っ切るために捨てた。

電機製品は全部新品に買い換えたが家具は今すぐ居る物でもないよな…っと思っ買っていなかった。

しかし、本は段ボールから出しているので床に沢山の本の塔を連ねており、歩きにくく、服もクローゼットがなくしまえないので大半

がまだ段ボールに眠っている。

椅子もないため、本の間に座って読んでおり、体のあちこちが痛い。机もなく、使い勝手も悪いし…此処を覗いてみて良いのが有ったら買っておこう。と思い、怪しげなノモットと言う店に私は足を踏み入れた。

重く無駄に装飾で飾りつけた（装飾と言ってもやはり暗く髑髏とか…）扉を開けた。

扉には錆びたベルがついており鈍い音を立てて私が訪れたことを店の主人に告げた。

中は薄暗く、オレンジ色のランプが所々ついている程度だった。

「いらっしやい。お嬢ちゃん」

店の奥から低い、ハスキーな声がして声をした方を見ても暗くて誰かが居る？ぐらいの認識しか出来ない。

しかし、それよりも私には“お嬢ちゃん”と言われた方が心外だった。

「ま、古いものしかないけどみてってよ。」

声の主には私が見えているようで、一方的に見られるのはイヤだなーっと思いつつ家具が所狭しと並ぶ店内を歩く、家具は今にも崩れてきそうだった。

地震が来たら終わりだろうなーっと思いながら家具を見て回る。

古いヨーロッパで使われたようなごてごての装飾を施されたカビ臭いにおいがする家具が多い。

しかし、所々真新しい物もあったり、コレ…売ったらダメだろ…と思う物もいくつか。

その中で私の目を引いたのは一つの赤い一人がけ用の椅子だった。

座ってみるとしっくりくる。

…コレ…買おうかな…。

「ソレ、気に入ったみたいだね。」

椅子に座ってぼんやり買いか買わないかを考えていたらいつの間によら正面に人が立っていた。

さっきの声の主だ。

低い、ハスキーな声から分かるように男で、身長が高く色が白い。

顔立ちは整っておりなぜこんな所で家具なんか売ってるんだろうもつたいないと思うほどだ。

「此処にある家具はみんなワケありなんだ…。気に入った物があるのはその“ワケ”に魅せられたからだよ。」

男はにつこり微笑んで言った、ワケありって…

「そんなもの売るなよ…。」

私は男を睨んでぼつりと言った。

すると男の顔がぴくりと反応したのに気が付いた。

しかし、本当のことなんおで言い返せないのだろう。

「ねえ、聞きたい？その椅子の話。」

男はそう言って私にっこり微笑んだ。上手く話を変えたなーっと思っ。

そして、私の男の対するイメージは変人に決定した。

でも、この男にはなぜか警戒心を緩めさせる力がある。

「…何？」

私は男を見据えてぶっきらぼに言った。

男は少しビクリした表情になったがすぐにまたにっこりと微笑んだ。

「じゃあ聞かせてあげるよその椅子の話。」

そう言って男は椅子の過去を語り始めた。

第三話 l a s t s h o w N o . 1 (後書き)

はい、第三話 l a s t s h o w N o . 1 終わりました。

やっと第三話目と言うことでやっと物語らしくなったのだと思います。

少しずつですが意識して感情描写を少なくしてみました。

今回は怪しげなお店の名前を悩んだあげく大好きなバンドのアルバムの名前に似せてみました。

今回は少年の語りから入る予定ですが赤い椅子“ワケ”と、“l a s t s h o w” と言う名前の意味。

分かるかもしれません。

“かも” と言うのはですね、俺は下書きなどもなくいきなり書くタイプなんです。

まあ、簡単に言うとは計画性がないのですが…。

下手な癖に計画も立ててないとか最低ですね…。

って、何で苦労話に…。

まあ、読んで頂きありがとございました。

都合が良ければ是非、次回作も書く予定なので読んで頂ければと思

います。

本当に此処まで読んで頂きありがとうございました。

第四話 l a s t s h o w N o . 2 (前書き)

この作品は第四作目です。

まだ、一、二、三話をお読みでない方はそちらを先にどうぞ。

若干グロイシーンが有ります。

苦手な方はオススメしません。

第四話 l a s t s h o w N o . 2

赤い椅子。

彼は昔は幸せな家の子用の椅子だった。

その子は彼が大好きだった。

ご飯を食べるとき、宿題をするとき、テレビを見るときいつでも彼に座っていた。

赤い椅子。

そう、人間から見ればただの椅子なのかもしれない。

しかし、椅子も生きているのだ。

いつだってその子を見守っていた。

―そして、“ワケ” となる事件は起こったのだ。

その日は雲が黒く、今にも嵐が来そうだった。

その子はいつものように彼に座り、窓の外を心配そうに見ていた。

「マリア。ご飯よ。」

「はい。」

彼を愛用する子の名前はマリアと言い、元気で明るい女の子だ。

マリアのお母さんは専業主婦で、お父さんは普通の会社員。

彼の家の人たちは、何不自由なく暮らしていた…

「こらマリア。食べる時は肘をつかないの」

「はい。」

いつもの夕食の風景。

温かい家族の会話。

密かにいつもその会話に耳を傾ける。

会話の内容は大半がマリアの学校での話で、今日は数学で発表した
だとか、国語で先生に褒められたとか、隣の席のメルが授業中に眠
ってただとか…。

それを楽しげに話すマリアとマリアを見守るマリアのパパとママが
彼は大好きだった。

「ああー。」

マリアが少し間拔けな声を上げた。

マリアの視線の先には窓。

とうとう黒い雲から雨が降ってきたのだ。

「明日外でバスケットだったのに…最悪。」

マリアは不満げに頬を膨らませた。

雨は次第に強くなり、風も出てきた。

風はまどを忙しく叩き、雨はバケツをひっくり返したような勢いで振っている。

暫くすると雷も鳴ってきた。

その時

ーバンッ

大きな音が家に響き渡った。

キッチンに居た家族は3人…。

みんな揃っている。

みんなは顔を見合わせた。

「多分風で玄関の扉が開いたんだ。ちょっと見てくるよ。」

マリアのパパはそう言ってダイニングから出て行った。

マリアのママとマリアだけがダイニングに残されてしまった。

暫く黙って夕食をとっていたがマリアのパパがなかなか帰ってこない。

「パパ…遅いね…。」

マリアがスープをちびちび啜りながらそう言った。

ママも心配になってきたのか貧乏揺すりを始めた。

「…マリア。ママ、パパを見てくるから食べていてちょうだい。」

ママはそう言って椅子から立ち上がった。

マリアは一人で食事をとった。

しかし、パパもママも食べ終わっても帰ってこない。

マリアは一人で暇そうにしていた。

食べ終わって3分が経ち我慢が出来なくなったマリアは玄関に向かった。

キッチンを出るとそこには赤い水たまりが広がり、水たまりの真ん中にはママが寝ていた。

そう、ママは死んでいた。

マリアは暫く啞然とママの死体を凝視していた。

その時…

ゴトッ—

突如鈍い音がした。

マリアはその音で意識がしっかりした。

もう一度ママを見た。

「キャーーーーー」

マリアは思いっきり叫んだ。

恐怖に顔は引きつり、顔から血の気はない。

さっきまで話をしていたママは死んだ。

マリアはそれを認識した。

マリアは冷静さを失い急いでダイニングに戻った。

彼に座り、必死に震える自分の体を押さえつけた。

「ママ…が…」マリアはしきりにその言葉を繰り返した。

コツンッ コツンッ ブルッ ブルッ

足音と何かを引きずる音がダイニングに向かって居る。

マリアはパパだと思い顔を輝かせた。

しかし、ダイニングの入り口に顔を出したのは斧を持った見知らぬおじさんだった。

「お嬢ちゃん此処の子かい？残念だね…ママとパパの元へ逝きなさい。」

おじさんは笑って意味の分からない言葉を叫び斧を振り上げた――

「…。マリアちゃんどうなったの？」

さつきまで静かに話を聞いていたお嬢ちゃんが口を開いた。

「んーマリアは死んだよ…。首から上がなくなってたらしい。で、首がなくなった体で必死にこの椅子にしがみついていたんだって。犯人は殺人目当ての狂った奴だったらしい。」

そう、この椅子はマリアの死んだ椅子。

そして、このお嬢ちゃんを魅了した椅子…。

俺にはお嬢ちゃんの過去に何があったか知らない。

だが、この不幸な椅子を選んだお嬢ちゃんは決して楽な人生ではな

かったと思う。

「…。私この椅子買う。」

お嬢ちゃんはポツリとそう言ってマリアの椅子から立ち上がった。

マリアの椅子はマリアの血でさらなる鮮血に染まっていたと聞いている。

その後、この椅子はなぜか人を拒むようになった。

誰かが座るとどういっわけか動き出すらしい。

だが、このお嬢ちゃんが座っても何の変化もなかった。

椅子もお嬢ちゃんを認めたのかもしれない。

「…。ねえ、この椅子いくら？」

お嬢ちゃんが怪訝そうに眉にしわを寄せて言った。

「この椅子は、…。じゃあ5000円。」

俺は左手で5を作りそう言った。

お嬢ちゃんはポケットから無造作に5000円札を一枚取り出し俺に差し出した。

そのときに「じゃあって何よ…。」と言う突っ込みが入ったのは聞き流す。

ああ、…マリアの椅子が売れたなーっと内心少し寂しく思う。

コイツはこの店に来てからずっと居たのだ。

長い付き合いだった。

「…。ねえ、何でこの店“last show”って言うの？」

お嬢ちゃんが唐突にそう言った。

一瞬ビックリしたが、結構聞かれる質問だった。

「この店の家具たちが輝ける最後のパートナーを見つける場だからだよ。ここから最後のショーが始まるから。だから“last show”。」

俺はそう言ってお嬢ちゃんに微笑んだ。

お嬢ちゃんはそんな俺を見て眉に寄っっているしわをもっと寄せた。

何が気に入らないのやら。

「ねえ、そのお嬢ちゃんって言うの止めて。私は夢野怜って名前があるの。」

お嬢ちゃん否、怜がそう言った。

「分かったよ怜ちゃんね。俺はレイスト・ユナティーク。宜しくね。」

俺はそう言っ て 怜に手を差し出した。もちろん握手をするため。

すると怜は少し驚いた顔をしてすぐにまた、眉間にしわを寄せた。

今度は悲しげに…。

「私…。誰とも関わらないの。」

彼女はそう言っ て 俺から離れてまた店内を回り始めた。

彼女にはやはり、人には言えない過去はあるようだ。

ま、人間人にそう簡単には言えないことが一つや二つあるものだと思ひ知りたいとゆう自分を好奇心を抑えた。

“last shoe”そこは、沢山の“ワケ”を持つ家具たちがアナタのご来店をお待ちしております。

第四話 l a s t s h o w N o . 2 (後書き)

ああー終わりましたねー。

何かグロクなっってしまった。

っと言うか読者の人が最近増えてきて下さって大変嬉しく思います。

しかし、なぜか謎が…。

みんな1話目より2話目を読んでるんですね。

なぜでしょう？

ま、楽しんでもらえれば良いんですけどね。

っと、まあ個人的？な話はさておき、第四話どうだったでしょうか？

やっと主人公の名前が出てきました。

コメソレイ
夢野怜です。

青年の名前も出てきたり。

まあ、レイストって名前って…って思った人も居るやもしれませんがそこは突っ込みないしでお願いします。

それでは、また次回作でお会いできれば幸いです。

第五話 l a s t s h o w N o . 3 (前書き)

この作品の他に一話、四話まであります。
初めての方はそっちから読むのをオススメします。

第五話 l a s t s h o w N o . 3

“ l a s t s h o w ” に入って早くも1時間が経とうとしている。
未だにこれだと思ったのは椅子だけだ。

これだけ家具が並んでいてもしっくりくる物は早々ないのだろう。

そして、家具が見つからないことよりも私の胸にはレイストとか言うこの店の憎たらしい店員の接客の悪さと、ついその変人の話に聞き入ってしまった自分の不甲斐なさに落胆していた。

しかし、レイストと話をしてから今までであった胸のモヤミたいなモノがとれたような気がする。

この街にもこう言う人が居たのだと。

まあ、レイストの場合は例外なのかも知れないが…。

時計を見るともう1時になる。

食料が底をついているのにお腹が空いてから気が付いたため、今も凄く腹が減っている。

腹が鳴らないのが不思議な程だ。

店内は広く、多くの家具が所狭しと並んでいるため、まだ全部の家具を見切れてない。

だが、お腹が空いている。

と、言うことで私は本来の目的を遂行することにし、赤い椅子の有る所に戻った。

…に、してもこの椅子を持って帰っていたら絶対目立つだろう。

郵送などとはできなのだろうか？

でも、こんなちよつと一昔前の方式しか知らない様な店が便利なサービスを導入しているのだろうか。の前に知っているのだろうか？
まあ、聞いて損にはならないだろうし、一様文明社会に生きる同じ人間だ。郵送くらい知ってるだろう。…イヤ、同じ文明社会に生きている人間として知っていて欲しい。

「ねえ、レイストさん。郵送って出来る？」

私はレイストに訪ねた。一様“さん”にアクセントをつけて。

レイストは名前が呼ばれたことに驚いたようで目を見開いていたがすぐに元の普通の顔に戻った。

「郵送って言うか、俺が車で届けるサービスは有るけど？」

レイストはそう言って笑った。

ああー、一様あるのか…。にしても私的にはこんな怪しい奴に住所は教えたくはないが。

だが、椅子を担いで帰るわけにもいかないのだ。

「…。お願いする」

私はそう言っただけで溜息をついた。

すると、レイストがどこからともなくペンと紙を取り出した。

そして「じゃあ、コレに住所書いて」とペンを私に手渡した。

私は住所を適当な字で書いてペンを紙の上に乗せた。

手渡して返す気は毛頭ない。

「いつ持って行けばいい？」

レイストが紙を見ながら聞いてきた。

いついけば良い？って聞かれてもなあ。

「適当で良いよ。」

私はそう言っただけで踵を返し出口に向かった。

出口に行くまでもう一度赤い椅子否、マリアの椅子を見る。

やはり、マリアの椅子になぜか惹かれるのだ。

「それじゃあ。」

私はマリアの椅子の横を通り過ぎ、振り返ることなく右手を挙げた。

「またお越し下さい。」

レイストの間抜けでやる気のない声が店内に虚しく響いた。

私はその声に答えることなく“last show”を後にした。

にしても結局レイストが客。 っと言つか私に敬語を使ったのは最後だけだった。

こっちは一樣客だぞ…。 敬え、他の店なんてしつこいくらいお客に付きまとうのに。

別に付きまとうて欲しいワケでもない。 と言つかどっちかって言うとおほっというて欲しいが。

「お客様は神様。」 きっとこの店の接客方にはそんな素晴らしい目標はないのだろう。

しかし、レイストに対する文句は声に形成されることはなくただ私の心の中で響いていた。

恐らく私はまた“last show”を訪れるだろう。

恐らくと言つか…絶対と言っても過言ではないだろう。

そう思う。

此処は魅力的だ。この雰囲気が好き。

この街最初に訪れた店“last show”新しい何かを期待しても良いかもしれない。

両親が死んでから久々に希望を持てた気がする。

まあ、“last show”が良いのとレイストは別として…。

“last show”のお陰だろうか？店を出た後の私の足取りは来るときに比べて軽かった。

第五話 last show No.3 (後書き)

はい、第五話終わりました。

にしても…てつきりlast showシリーズは終わったと思っ
た方も居るのでは？

まあ、自分もNo.2で終わらせようと思ってあんなややこしい終
わり方したんですけどね。

なんか次の話に繋ぎ辛くてNo.3も書きました。

今までに比べて主人公の心情が少し変わったところで、結構上手く
書けたので俺的にNo.3が一番良いのかな？と思います。

つと言うか…。やっぱり計画がないため次回作どうしようと思っ
てます。

つて後書きに書くことではないですね…すみません。

そう言えばやっぱり第二話が人気で沢山の人が読んでくれてるん
ですよね…

どうしてでしょう…

まあ、こんなショボイ作品ですが今後も読んで頂けたら幸いです。

第六話 M a r i a（前書き）

この作品の他にも5作品ございます。
一様連載作品なのでそちらから読むのをオススメします。

第六話 M a r i a

コンッ コンッ

朝から誰かが玄関のドアをノックしている。

五月蠅いな…。

私はノック音を無視して頭まで布団を被り、寝返りを打った。

ドンッ ドンッ

さっきよりもノック音は大きく、荒くなった。

私は重たい体を起こし、目を擦る。

低血圧気味の私はかなり不機嫌で、温かい布団を這い出た。

まったく誰だこんな朝から。一言文句…イヤ、とにかく罵倒して追い返してやる…。

玄関まで少しずつすり足で向かい、鍵を回しドアのノブに手をかける。

少し開けると…

ボタンッ―

さっきのは見なかった事にする。

「何で閉めるの…」

閉めたと思ったドアにはアイツの足が挟まっており、ドアが完全に閉まるのを防いでいた。

朝一でコイツを見るだなんて何かの呪いなのか…

それとも神はついに私を見放したのだろうか？

私が何をしたと言うのだ神様の裏切り者…

「はい、コレ椅子ね。ちゃんと届けたんだしお茶でも出してよ。」

レイストがそう言いながら私に笑いかけている。

しかし、そんなの関係ない。マリアの椅子が手に入った今、もう私にのってコイツは用済み、要らないのだ。

つと云うかなぜコイツは私の家でも自分は客の様な顔でお茶を出せなんて言っているのだ。お前なんかに出すお茶なんてない。雑巾の絞り汁で十分だ。

「ねえ、さっさと帰ってよ。」

私はマリアの椅子をたぐり寄せ、心底嫌そうにレイストに言った。

レイストの顔は笑っているが額には怒りのマークが見えた。が、そんなことされてもお茶をだす気はさらさらない。

つと言うかこの場から去って欲しい、同じ空気を吸わないで欲しい。

「ねえ、怜ちゃん。お「黙れ、帰れ、出て行け。」

レイストの言葉を遮り適当に思いついた言葉で罵る。

そして、レイストの背中を押してドアの外まで連れて行きドアを閉め、鍵をすかさずかけた。

これでアイツは入ってこれない。

ドアの向こうで「…。怜ちゃんのケチ」っと言っレイストのキモイ拗ねた声が聞こえてきたが無視する。

さっきレイストに届けて貰った…届けさせたマリアの椅子が玄関にあって私は頗る機嫌が良い。

まあ、レイストを見たのは癪だから会わなかったことにする。

暫く何処に椅子を置くかを悩んだ。

部屋には椅子以外の家具がないためやはり、何処に置いても寂しくなってしまう。

まあ、また家具も集めれば良いやと思い結局椅子は日の当たる窓際に置いた。

椅子に座って本を読むととてもぽかぽかしていて眠気に襲われた。

この場所は読書には向いていないようだが、朝睡眠を変人に妨害されたこともあり眠気に抵抗することなく私は眠りについた。

「…。」

目が覚めたらもう部屋は真っ暗だった。

目を目を疑ったがどうやら本当に夜のようだ。どれだけ寝てるんだ私は…

私は電気をつけようと椅子から立ち上がり電源がある壁を手探りでさわり電源を探した。

その時、何かが私の横を通り過ぎた。

何かが通った方に目をやると蛍だろうか？何かが点滅している。

その光はマリアの椅子に止まった。すると、光は大きくなり人型になった。

そして、光は一層強く輝いた。私はその眩しさで目を閉じた。

一瞬の出来事だったと思う。

その一瞬で光は小さな少女へと姿を変えた。

恐らく7歳8歳ぐらいだろう。髪が長くそれをポニーテールで後ろに結い、華奢で可愛い。

「ふん。アナタが新しい持ち主。あ、申し出が遅れちゃった。私はマリア。この椅子の初代の持ち主よ。」

彼女は私を鋭い目つきで見てそう言った。

この子がマリア…って私はいつから霊が見えるようになったのだ。

「ちょっと、名乗ったんだからアナタも名乗ってよ。驚いてるのは分かってるけどそのぐらいの礼儀はわきまえて欲しいわ。」

少女はそう言っただけで私の見た。

小さい癖に生意気な少女だ。だが、話を聞いて勝手に作り上げていたマリアのイメージには近いかもしれない。

「私は夢野怜。」

私は少女を見下ろして言った。

「夢野怜…」

マリアは私の名前を呟き少し考え込んだがすぐに頷いた。

「宜しく。」

そう言ってマリアは手を差し出して来た。

…。っと言ってもマリアは霊体だ。触れられるわけもない。

「あら、やっぱり透けるわね。」マリアはそう呟いて寂しげに笑った。

そんなマリアを見て、生きたくても生きれなかったマリアに比べて私は何をしているのだろうと思った。

私はマリアと違って生きているのに…折角生きているのに何もしてないし目標もないのだ。

暫くの沈黙が続きマリアが口を開いた。

「この椅子はね…パパとママに貰った大切な椅子なの。アナタは大切にしてくれる？」

マリアが真剣な顔つきでそう言った。

きつとこの椅子が気がかりであの世に逝けずこの世に留められているのだろう。

私は黙って、しかし力強く頷いた。

「…安心したわ。新しい主人が良い人で良かった。じゃあ私は逝くわ。」

マリアは安堵の溜息をつきながら愛おしそうに椅子を見て言った。

マリア… もう逝くんた。

でも、長い間この椅子のパートナーを探してあげてたんだもんね。

疲れたよね。

「お疲れ様。」

私はそうマリアに言った。

マリアは少し微笑んでポケットから可愛らしい薔薇のブローチを取り出した。

「コレも上げる。私だとも思ってたよ。」

そのブローチも触れないと思ったのにそのブローチは透けることなく私の手の中に収まった。

そして、マリアは霞んで消えて逝った。

霊体は空に昇っていくと思っていたがどうやら違うらしい。

…。目が覚めるとマリアの椅子の上で寝ていた。

椅子で寝ていたせだろうか体のあちこちが悲鳴を上げている。

にしてもマリアは夢だったのだろうか？

きっと夢じゃない。

だって私の手の中にはマリアから貰った薔薇のブローチが有ったからだ。

ありがとう、マリア。私何か目標を探してみるよ。

きっと簡単には見つからないと思うけど。

私はマリアのブローチを椅子の上に置きシャワーを浴び、服を着替えて部屋を後にした。

「……。ねえ、結局心配で逝けなかったんだけどどうすれば良いかな？」

少女は一人椅子の上で溜息混じりにぼやいた。

透けて向こう側が見える足をぱたぱたを振り怜が出て行ったドアを見る。

「おねーさん。本当に頼んだよ。」

マリアは小さくそう呟くと、再び霞んで消えて逝った。

第六話 Maria（後書き）

第六話終わりました。

この作品はテストが分からないので諦めてしまい、時間が余って書いた作品です。 良い子は真似しないように。

チャイムのせいで中途半端に終わってしまい、話がまとまってなかったのだから微妙なできになっています。

まとまりきってないんです…

すいません。

でも、小さい子は好きなのでマリアが出せて満足です。

この他にもテスト中に考えた作品が有るのでまた機会が有れば掲載さしてもらえたらなと思います。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

今後も連載させて頂く予定ですので読んで頂けたら幸いです。

第七話 この気持ち（前書き）

この作品の他にも、一話〜六話まであります。
一様連載小説ですのでそちらから読まれるのをオススメします。

第七話 この気持ち

部屋を出て早、1時間。

目標を探すなんて思っていたけど、目標を探すのは楽ではない。

っと言うか、目標と言うモノは探すモノなのだろうか？

だが、結局言葉は胸の内で形成されたに過ぎず、答えが帰ってくることはなかった。

そして、思い浮かんだのが“last show”に行く案。

まだ椅子以外の家具が手に入っていないし、店内を全て見回りきれていない。

私は早速“last show”に向かった。

last show

「いらっしやい。って怜ちゃんじゃん。」

入り口の扉を開けると、まずレイストの声が私を迎えた。

声がした店の奥に目をやると、レジのカウンターに案の定笑顔のレイストが居た。

私はやはりコイツが気に入らない。いちいち癪に障るのだ。

私はレイストを完全に無視して、店内に目をやった。

客は私の他には居なくて、本当にこの店は大丈夫なのだろうかと疑問を抱く。

が、まあ関係ないことなのでその疑問は頭か振り払った。

そして変わりに今欲しい家具が何かを考える。

えっと…本棚、机、ベッド、クローゼット、ランプ。

基本的な家具を頭に浮かべて、店内を再び見回す。

家具は順番などは関係なく、所狭しと並んでおり、どうやら全部を見て回って確認するしかないようだが…

店は客が居ない癖に広く、家具の数も多い。

私は早速店を見て回り始めた。

2時間かけて店内を回り終わった。

気になるモノはなかったが、マリアの椅子にあいそうな家具を選んだ。

「レイスト…サンちょっと。」

私はレイストを呼び、買うことにした家具を全部見せて回った。

「えっと、全部で145000円かな。」

レイストはそう言って私を見た。

私はまた、無造作にポケットから札を取り出した。

「じゃあまた届けて。」

お金を渡すときにそう言っでレイストを見た。

レイストは笑って「了解」っと言った。

私はやることも終わったので店から出ようとする

「あ、怜ちゃん。次はお茶出してね。」

と、レイストが笑った。

お茶？レイストは昨日の朝のことを未だに根に持っているようだ。

しつこい男は嫌われるのを知らないのか？あの人は。

「雑巾の絞り汁なら出して上げますよ。」

私はそう言っでレイストを見て笑った。

レイストは驚いた顔をしてきた。

…何コイツ。

「俺さ、怜ちゃんの笑う顔初めて見た。笑ってる方が可愛いよ。」

レイストは恥ずかしそうにもせず、さらりとそう言った。

私はその言葉に自分の頬が紅潮するのを感じた。

顔が…熱い…。

私は急いで“last show”を後にした。

家

“last show”から家まで走って帰ってきた為、息が切れて苦しい。

だが、体が熱を帯びて焼け付くように熱い。

心臓がいつもより早く脈打つ。

全部、走ってきたから…

きつとそうだ。

走る前から始まっていたこの症状を心の中で誤魔化す。

きつと…走ってきたからだ。

気が付いてしまった自分の気持ちに、私は蓋をした…

翌日

昨日の心臓の鼓動も、焼け付くような体の熱さもなくなっていた。

私は内心で安堵の溜息をつき、布団から這い出た。

時間を見ると、すでに昼。

どうやら、また寝過ごしたらしい。

お腹は特に減らないのでご飯は食べず、マリアの椅子の上で日課の読書を始めた。

暫く本を読んでいると、インターホンがなった。

しかし、今私の元を訪れるのは一人だけだと推測される。

多分、レイストだ。

私は玄関に行き、深呼吸をして、意を決してドアを開けた。

「ちっす、怜ちゃん。届けに来たよ。」

そこには、案の定レイストが立っていた。

…。さつきより少し心臓が早く脈打っているような気がする。

でも、信じたくないから気のせいだと言うことにしておく。

「っと言つても一人じゃトラックに積みなくてさあ。手伝って。」

ああ、やっぱりコイツはこういう人間なんだ。

私はレイストを睨んで

「パスタ奢つてよ。」

っと言つて靴を履いた。

レイストは笑顔で「おうっ」っと言った。

そして、私達はレイストの乗ってきたトラックに乗り込み、
“last show”に向かった。

last show

「じゃあまず、ベッドから運ぼうか。」

レイストはそう言つて、どんどん私をこき使い家具を運んで行つた。

普段、運動なんかしない私にとっては重労働だ…

全部の荷物を運び終え、私はその場にへたり込んだ。

疲れた…

「じゃあ、今度は怜ちゃんの家に運ぶよ。」

レイストはそう言ってトラックに乗り込んだ。

…レイストはどうやら私は過労死させる気のようにだ。

私は渋々トラックに乗り込んだ。

家

またしても、レイストにこき使われた。

疲労した体を酷使して働いた。

「じゃあ、お疲れ様でした。」

レイストはそう言って私に微笑みかけた。

…。

また、頬が紅潮するのを感じた。

私は急いでレイストから視線をそらした。

にしても、同じ量の、いや。私以上に働いたくせにどうしてコイツ

はこんなにも元気なんだ。

コレが男子と女子の差ですか…。

なんとなくコイツに負けた気がしてむかついた。

「じゃあ、約束通りパスタ食べに行こうか。」

レイストはそう言って私に手を差し出した。

手を繋げって意味だろうか…

が、私は無視してレイストより先に歩き始めた。

レイストは行き場のない手をブラブラ振りながら、後ろから走って追いかけてきた。

「何処で食べる？」

「んゝこの辺知らないから何処でも。」

私はそう言っでレイストを見た。

レイストは一人で「じゃあ、ファミレスで良いかな…」「イヤゝでもなゝ」と、呟いていた。

「じゃあ、ファミレスで。」

私がそう言っで、レイストは「了解」っで敬礼をした。

ファミレス

ファミレスに入って私は、パスタとクリームソーダ。レイストはなぜか、唐揚げ定食を注文した。

先に出来たのはパスタ。私はまだレイストの唐揚げ定食が来てないのに、その場でパスタを食べ始めた。

私の好物はパスタで、自然と笑顔が溢れる。

つと言いたところだが、レイストが食べる姿を凝視してくるので笑顔でなんか食べられない。

本来は凄く美味しいはずのパスタの味も激減だ。

「…。見ないでよ、食べづらい。」

私はレイストを睨んで言った。

コイツには他人への礼儀と言うモノがないのだろうか。

まったく、接客も出来ないし、礼儀もない。

このファミレスの店員を見習って欲しいものだ。

見せかけだけの笑顔を見せ、テキパキと働き、敬語を使う。

当たり前のことが凄く思えるよ…コイツを見てると。

私がフォークを片手にそんなことを考えていると

「…怜ちゃんってさ一口に食べる量少ないね。」

っとレイストが笑った。

…コイツは完璧に私をバカにしてるんだ。

接客がどうか、礼儀がどうか言うんじゃなくて…コイツはまず、人間がどういふものかを見直すべきだ。

私は眉間に皺を寄せ、さっきよりも鋭くレイストを睨んだ。

そもそも、なぜ私がこんな奴に食べる量までツベコベ言われなくてはいけないのだ。

私はレイストを無視して、再びフォークでパスタを食べ始めた。

暫くして、レイストの元にも唐揚げ定食がやって来た。

レイストは子供のように笑い、唐揚げにかぶりついた。

…。髪が銀髪の青年が、唐揚げにがつついてる。

なぜか、その不自然な絵に笑いがこみ上げてきた。

すると、レイストがこっちを見て

「何笑ってるの?」

つと首を傾げた。

口のへりにご飯粒が付いている。

ダサイ…。

だが、本人は気づいていないようだ。

私はうつむき笑いを堪えた…が、我慢も出来ず吹き出してしまった。

「え、何？」

レイストは未だに理解が出来ず、頭の上にはクエスチョンマークが飛んでいる。

私は黙って自分の口のへりを指さした。

すると、レイストも分かったのか自分の口のへりに触った。

「…。もつと早く言ってよ。」

レイストはそう言ってふてくされた。

私はそんなレイストを見て、また胸が高鳴るのを感じた。

コノ気持ちは何？

―何？

本当は分かってる。

素直に言いたくないだけ。

私はきつと…レイストが好きだ…。

第七話 この気持ち（後書き）

やっと、第七話になりました。

読者数は伸びない一方です…。

でも、読んで下さっている方々に支えられ、ココまで来ました。

今回の話は、実はネガティブな女の子の暗い話にしようと思っていたのですが、恋愛系に変更しようと思います。

この作品は、なぜかほのぼのした作品になりました。

恐らく、今後もほのぼのが続くと思いますが、怜の恋の行方を見守って頂ければと思います。

今後も頑張って作品を書いていきますので良かったら続編も読んで下さい。

第八話 home

新しい生活に新たな家具たちが加わり、生活が破綻していたのが結構改善されてきた今日この頃。

そんな私の元に一本の電話がかかってきたのは、ある普通の日の昼下がり。

ピルルルルッー

ピルルルルッー

買ってから鳴ることのなかった家の電話が突然鳴りだした。

つと言つても、私はそんな電話に出ることすら面倒で電話の音なんか聞こえないと言つた風に再び本を読み始めた。

えっと…何処まで読んだっけ？

ああーそうそう、主人公が電車にひかれてどうなったか気になった所…。

ピルルルルッー

ピルルルルッー

電話は鳴りやまず、集中して本も読めない。

オイ、今丁度クライマックスなんだよ？静かに読ましてよ…

心の中でまだ分からない電話の相手に心の中で悪態をつき、重い足を引きずって私は渋々電話に出た。

「もしもし。」

無愛想にそう言つと、

「もしもし、冠野さんのお宅でしょうか？」

つと言つ声がした。

声だけ聞くとかなりのおじさんで、こんな声のおじさんは私の記憶には居なかった。

「そうですけど？」

私は、少し警戒しながらそう言った。

「私は、野村不動産と言う者ですが…物件の受取人が決まりましたので、その打ち合わせを少ししなければなりませんので、明日の3時に崎野市の“レント”と言うお店に来て下さいませんか？」

そう、ただの不動産のおじさんからの電話だった。

もちろん、おじさんの顔を知っているはずがない。イヤ、知ってい
たら逆に怖い。

に、しても売れたのか…家。

私は内心少し寂しい気持ちになりながら

「分かりました。」

っただけ言って受話器を置いた。

久しぶりに帰るのか…崎野市。

私が生まれ育った町。

きっと旧友なんかが居るのだろう。

みんなは元気だろうか？

心の中で故郷を思い描く。

凄く温かくて、居心地が良くて、みんな笑顔で…

父さんと母さんが居た―

久しぶりに思い出した故郷は、私の心を傷つけるところか温かくした。

少しの時間しか経っていないのに…

人間の心はすぐに変わってしまうモノだと改めて思った。

イヤ…きっと違う。両親と言う支えを失って、新に、レイストと言う支えを見つけたこと。

それが何より変わったことだと思う。

翌日、私は故郷の地を踏み、約束の“レント”の前に立っていた。

このお店は、家の近所にある店だ。

何か祝い事があると、両親と3人で来ておいしいと笑いながら料理を食べたものだ。

店に入ると、昔となんら変わりなくベルが乾いた音を立てて私を迎えた。

3時と言う半端な時間帯のせいか人は少なく店内は小さい頃より遙かに広く感じた。

何処に座っているのかと思ったが、客が座っているのは一つの机だけで、すぐに分かった。

電話のおじさんではない。凄く若い青年だった。レイストと同じぐらいだろうか？

つと言つてもレイストの歳なんて知らないのだけれど…

青年も私に気が付いたのだろうか？私の方を見て急いで来ていたスーツを整えて立ち上がり、私の方に向かって来た。

「あ、あの。夢野怜さんでしょうか？お…わたくし私は野村不動産の篠村シノムラと言います。」

青年、否、篠村はそう言つて名刺を差し出した。

私はそれを受け取り、どうせ読まないののでポケットの中に適当に突っ込んだ。

「あ、それではこちらに」

篠村はそう言つて私に篠村の座っていた席の隣の席をすすめた。

私はそれに従い、座った。

どうやら、家を買いたいと言っている人物はまだ来ていないらしい。

時間は今2時50分。

約束までまだ10分あるが…

私は喋る気がないし、篠村もどもって喋っていたくせに外の眺めてボケーッとしていし…。

ハア…

私は心の中で密かに溜息をついた。

カランッー

カランッー

入り口に取り付けられたベルが、気だるそうに乾いた音を立てて誰か来たのを知らせた。

その音で、私が入り口の方を見ると、子連れの若い夫婦が居た。

店内を見回し、篠村を見ると私達の方に向かって歩いてきた。

篠村も、その子連れの夫婦を見て立ち上がり、子供用の椅子を急い

で持ってきていた。

…この人達が私の家を買うつて言った人たちか。

子連れの夫婦に昔の自分と両親を重ねて少し、胸が痛んだような気がした。

夫婦と子供も座り、やっと話し合いが始まることになった。

「えっと、こちらが家の持ち主の夢野怜さんです。」

篠村が笑顔で子連れの夫婦に私を紹介した。

二人は笑顔で私にお辞儀をし、子供はきょつとんと私を見つめた。

「で、こちらがお家を買いたいと言われている咲谷さんです。」

私も二人にお辞儀をした。

暫くの間、篠村の長つたらしい解説に耳を傾けていると咲谷夫妻の子供の宏樹君がずっと奥さんの方にジュースをせがんでいる。

まあ、子供にとっては意味の分からない退屈な話だ。ジュースを飲みたい気持ちも分かる。

だが、奥さんはそんな宏樹君の講義を聞き流しているのだ。

そんな日常的な風景も、家族を失った私にとっては懐かしく感じた。

「それでえっと…家の件なのですが。」

咲谷夫妻が不安げにそう言った。

確かに咲谷夫妻にとっては今後の人生を左右するぐらいに大変なことでだろう。

そして、その全ての鍵を私が握っていると言っても過言ではないと思う。

「…咲谷さん達はどうしてあの家を選んだんですか？値段も決まっていない物件ですよね。」

私は咲谷夫妻に尋ねた。

自分でも結構意地の悪い質問をしたと思うが、やはりコレは聞いておきたい。

「なぜか惹かれたんです。あの家に。」

奥さんの方がそう言って苦笑いをした。

「答えになっていませんね…」そう言って言葉を探す咲谷夫妻を見て、私は思ったのだ。

きっと“last show”と同じ。何かのワケに魅せられて、そのワケとこの家族は共鳴したのだ。

きっとソレは神のお導き…。

「…。家、売ります。いくらぐらいが理想ですか？」

私は笑顔で咲谷夫妻に言った。

咲谷夫妻は驚いた顔をしたが、すぐにお互い顔を見合わせて暫くアイコンタクトをとると

「出来れば七百万ぐらいで。」

つと夫の方が言った。

「分かりました。じゃあ七百万で良いですよ。今日からもう勝手に使って頂いてかまいませんので、後の詳しい事はコノ篠村さんから聞いて下さい。それでは。」

篠村を指さしそう言うとい私はレントを後にした。

「ちょっと」

数秒してから篠村が慌てて止めようとしたが、そんなものは完全に無視し、私はレントのドアを閉めた。

あの咲谷夫妻宏樹君を見ていると、無垢だった自分を思い返し、少し泣きたくなるのだ。

レントを出て、駅に向かう。

あの、人でごった返した、騒々しい街に帰ろうと。

あの街には新しい私の居場所がある。

ソレは私の思いこみかも知れない。

だけど良いのだ。

あの街で私は十分満足しているのだから。

そう思い、日がまだ高く昇る青空に向かって私は満足げに微笑んだ。

数日後の昼下がり。

丁度、昼ご飯のサラダを作り終わったとき、また野村不動産から電話がかかってきた。

今度は篠村が電話係のようだ。

「銀行に七百万円振り込んでおきましたから。つと言うか、あの後僕がどれだけ大変」

ブチッー

篠村の愚痴を途中で切って、作り終えたサラダを冷蔵庫に入れ、私は銀行へと足を運んだ。

本当に七百万が振り込まれていた。

七百万で思い出の家は私のモノではなくなった…

そんな、現実味の湧かないことを考え、そのまま駅に向かった。

向かったのは昔の自分の家、今では咲谷家…

家は外見は変わっていないものの、玄関には沢山の花が飾っており、表札はすでに咲谷になっていた。

家の中からは楽しい家族の笑い声が聞こえてきていた。

この家族には不幸が来ないようにと心の中でそつと呟き、そのまま故郷を後にした。

春になると、チューリップが可愛らしく咲いていた庭。

夏には、和室につるされた風鈴が涼しげに鳴り、家族で縁側に座りスイカを頬張った。

秋になると、家の前を焼き芋屋さんが通った。

冬になるとコタツでみんなでみかんを食べた

そんな当たり前の日常が壊れてしまわないように。

宏樹君は幸せに育って欲しい。

私のように孤独にはなって欲しくない。

両親が死んだ当時なら、きっと、こんな事は思えなかった。

両親を奪った神が、周りの同情が、世の中の全てが憎かった。

だけど、人間は時と共に変わるのだ。

死んだ人間は思い出となり、感情もいつしか思い出と共にしまい込まれてしまうのだ。

だけど、ソレは決して悪いことではないと思う。

変わることは大切だ。

だって、両親の時間は止まってしまっても、私の時間は動いているから。

両親が消えてしまっても、私には彼が居るから…

父さん、母さん、ゴメンね。

ずっと…ずっと一番だと思ったのにね。

私は胸の中で両親にそう言った。

私の中での一番は今も彼なのだ。

だけど、絶対忘れない。父さんも母さんも、とても素晴らしい私の大切な家族だと言ったこと…

最後に心の中でそう呟いて、私は電車から自分の新たな家のある街に降りた。

彼に会いたい―

駅を出て、すでに一番星の輝いている薄紫の空を見てそう思った。

第八話 home（後書き）

かなり時間をかけてやっと完成しました。

やっと第八話です。

つと言っても読者数はかなり少なめですが、読んで下さってる皆さん本当にありがとうございます。

最近書いた短編に読者数が抜けてしまいそうでかなり冷や冷やしています。

今回の話のhomeは怜が完璧に親への未練を断ち切る話です。

前まで結構引きずっていたのですが今回の話でいっきに怜が成長したと思います。

まあ、レイストを出したかったけど出せなかったのですが、コレから少し恋愛系多めで書いていこうと思います。

この話も前回のテストで考えたネタでした。

家が売れた話でも書きたいな〜っと思っていたらチャイムが鳴ってしまい白紙から始まった話ですけどね。

それでは、此処までこんなショボイ作品を読んで下さってみなさんありがとうございます。

コレからも読んで下さると嬉しく思います。

第九話 夏の夜には（前書き）

この作品は連載されています。

先に一話ゝ八話を読むのをオススメします。

第九話 夏の夜には

最近この“last show”に来るようになった少女。

その少女は、あまりこの店には来てくれない。

数少ない客。きっとそれも理由だと思う。

だけど、多分彼女に魅せられている自分が居る。

最近そう思うのだ。

「記録的な猛暑が続き、熱中症で倒れる人も…」

テレビのニュースアナウンサーが用意された原稿を無感情に読んでいく。

スーツをきっちり着こんだアナウンサーを見ているだけで熱くなってくる。

暑い…

本当に。こんな古ぼけた店には誰一人としてこず、ガタガタと危なげな音を立てて回る扇風機だけが俺に風を送っていた。

広い店内。だが、客は少なく、金もない。

なので、店にはエアコンが取り付けられていない。

だが、家具が所狭しと詰め込まれた店内は外より熱気があるのだろう。

このままじゃ自分も熱中症で倒れるのだろうと思う。

しかし、客の来ないこの店では発見はいつになるのやら…

そんなことを考えてながら時計を見ると、すでに夜の１１時。

閉店時間だ。

五月蠅い扇風機の電源を切り、電気も切った。

最後にゴテゴテの装飾が施されたドアの鍵を閉め（こんな店には誰も盗みになんかは入らないと思う）店より涼しい外に出た。

やはり夜だと昼より随分まだ。

夜の１１時にも関わらず昼と変わらない人の群れ。

その中に混じって繁華街に向かった。

濃い化粧と、やけに派手な服で着飾った女。

仕事帰りだと言うのに肩を組んでふらふらして酔っぱらっていたり、女に裏のある誘いをする男。

そんな腐った人間が溢れかえる繁華街。

その繁華街の一角有るバーに俺は入っていった。

「やっと帰ってきたか、レイスト。てつきり熱中症で死んでると思っただぞ。」

そう俺に話しかけてきたのは父の孝治。このバーの店長だ。

「おおー。今日は暑くてマジで死ぬかと思った。」

俺はそう言って父さんに笑った。

父さんは「じゃあもう寝とけよ。」と言って客に向き直った。

そもそも“last show”は知る人ぞ知る人気店の父さんのバー“Prayer”で金儲けをしまくって、趣味で立てた（もちろん父さん）ものだ。

だが、“Prayer”が忙しいので、結局俺に頼んでいるって感じだ。

じゃあ、建てるなよって話なのだが、自分としては“last show”を気に入っているので良いのだが。

ちなみに、エアコンなどは父さんが店の売り上げで買えと言っている。売れないんだって、アレ…

夜、家の自室にはエアコンがついているため快適だ。

ベッドに寝転がり、目を閉じる。

考えるのは、彼女のことです…

飯食べてなさそうだななんて思う。

そして、俺は結局そのまま眠りについた。

翌日。大体俺が起きるのは9時。

今日はいつもより早く目覚めた。

時計は7時を指している。

繁華街の汚れた輝きも昼には姿を現せない。

繁華街は夜の喧噪が嘘の様に毎朝静まりかえっている。

朝起きて考えることは、今彼女は起きているだろうか？ってこと。

今日は来てくれるのだろうか？と言うこと。

気が付けば、彼女のことしか考えていないのだ。

いつものように繁華街を後にし、“last show”に出勤。

出かけるのは10時なので、すでに日は高く昇っており暑い。

“last show”につき、鍵をあける。

ドアを開けると、中から熱気が伝わってきた。

今日も一日熱中症との戦いだ。

そんなことを思いながら、扇風機の電源をいれた。

金がないので、昼間は多少暗いが電気はつけない。

大体いつも客はこないなので、冷蔵庫を漁って何かを食べたり、テレビを見たり、本を読んだり。

つまり、働いていないに等しい。

だから、思うのだ。

彼女に来て欲しいと…

その日も結局彼女は来てくれなかった。

夜の繁華街を歩く。

たまに家にまっすぐ帰らず、気ままに繁華街を歩く時がある。

結構女に話しかけられたり、呼び込みの人に捕まったりするが、繁華街の人の五月蠅いほどの喧噪の中で育ったせいか結構この音が好きだったりする。

今日は散歩をしたい気分なので、繁華街の中を気ままに歩いていた。

ドンッー

暫く歩いていると誰かにぶつかった。イヤ…ぶつかられた。

下を見てみると…

「怜…ちゃん？」

怜ちゃんだった。

涙を大きな瞳いっぱいに溜め、今にも溢れそうだ。

そんなに勢いよくぶつかっただろうか…

「大丈夫？」

俺がそう言つと、怜ちゃんは立ち上がり走っていく。

「ちょっと、怜ちゃん」

俺はそう言つて怜ちゃんを追いかけた。

俺の方が足は遙かに速い、すぐに怜ちゃんを捕まえた。

「っ…」

怜ちゃんは何も言わずに俺の手を振り払った。

内心かなりショックを受けるが、コレを顔に出すわけにはいかない。

俺は、無理矢理怜チャンの手を取って歩き出した。

「！ちよつとヤメテ、放して！」

怜チャンがそう言つて暴れるが俺は反応しなかった。

そのまま家まで引きずつて行つた。

入り口である“Prayer”のドアを開けるといつもの賑わいでみんなは気づかなかつたが、唯一父さんはただならぬ雰囲気を感じてくれたようで、親指を立てて励ましてくれた。

俺は二階にある自室に入り、やっと怜チャンの手を放した。

怜チャンはすぐに逃げようとしてドアの所に行つたが俺の部屋は鍵が特殊なため開け方が分からないようだ。

俺は鍵を開けようと粘る怜チャンに黙つて近づいた。

「イヤッ！寄らないで！」

怜チャンはヒステリックに怒鳴る。

頑なに拒まれて悲しいが、そんなことを表に出すわけにはいかない。

怜チャンの肩を掴み瞳を見る。

泣きやんでいたが、今にも泣き出しそうで…

「何があつたの？」

俺がそう囁くと、怜チャンは再び泣き出した。

怜チャンのスカートに涙がこぼれ、染みを作っていく。

「…私。」

怜チャンはそう言つてまた黙り込んだ。

何で繁華街に居たの？

何で泣いていたの？

そんなに俺のことがキライ？

聞きたいことは沢山ある…

だけど、今は聞かないから…

だから…

もう、泣かないで…

俺は切にそう願つた。

暫くして、静かな室内に響いていた啜り泣く声も止んだ。

俺は、ずっと怜チャンが理由を行ってくれるのを待った。

2人の間には気まずい沈黙が流れる。

「…私。」

怜チャンがか細い声でそう言った。

「私…何も悪くないの…なのに…」

まったくなんのことが分からない、だけど何もしないよりはましだから…

俺は黙って怜チャンを包み込んだ。

怜チャンの肩が一瞬ビクツつとなったが、すぐになで下ろしてくれた。

「ゆっくりで良いから言って。」

俺はそう怜チャンに言い聞かせた。

怜チャンは何処か遠くを見るような目で語り始めた。

第九話 夏の夜には（後書き）

かなり時間を空けての投稿となりましたが…まあ、本当はもっと早く出来ていたのですが…はい。題名が決まらなくてですね。

結局適当な題名に…

本当に無計画なんですよ。

十話目はさつさと更新したいです。

コレからも応援…基、読んで下さったら嬉しく思います。

第十話 溢れる想いは…

世界は廻っていて。

その世界の中に私が居て…

広い広い世界の中で、私と彼は出会った。

だけど…素直に言えない。

どうして? どうして?

私は何をしたの?

神様なんて所詮人を見下しているだけなんだ。

それならいつそ…神様なんて消えてしまえば良いのに。

繁華街でレイストに出会ったのは少し前。

泣いてる所を見られて、私は逃げようとしたけど…

やっぱりレイストも男で、すんなり捕まって、恐らくレイストの家だと思われる繁華街の一角に構えるバーに連れてこられた。

泣いている私を見て、レイストは困ってて…戸惑っていて…でも、溢れ出す涙は止まってくれなくて。

だけど、そんな私を優しく包み込んでくれたレイストだから…だから、私は話そうと決めた。

「私は…何もしてないの。知らない若い男に囲まれて…それで…怖くって…みんな見てるのに助けてくれなくて…」

あの時の人々の同情する目、男共の獲物を狙うような目…

思い出すだけで怖くって…

体が震えて、涙が止まらない。

「男に体を捕まれて、触られて…。でも、体が動かなくて…その時、警察の人が来て、男は逃げて行ったけど…私も咄嗟に逃げたの。もしたら、レイストにぶつかった。」

私がそう言い終わると、レイストが私をさっきよりもきつく抱きしめた。

最初この大きな細いからだに包まれた時、凄くビックリしたけどその前にさっきの男共に触られたことを思い出して怖かった。

だけど、レイストが私を優しく包み込んでくれているのは分かってたから、凄く安心できで、心臓の音とか、体温とか…全てが心地よくて…

凄く幸せな気持ちになる。

さっきあんなことがあったのに、レイストに抱きしめられるだけでこんな気持ちになる。

きつと私は単純だ。

だけど、それで良いと思う。

「…。そっか、辛かったね怜ちゃん。」

レイストがそう言つて、私の頭を撫でた。

後ろから包み込まれている格好の私にはレイストの顔は見えない…

それだけが凄く不満で、振り返った時、レイストの顔は笑っているのに凄く怖かった。

「…。何処のどいつだ…。見つけたら殺してやる。」そんな呟きまで聞こえたような…

だけど、それは私を心配してくれている証で、凄く嬉しくて、そんなレイストを可愛く思う。

良いことなんてないし、神様は私をとことん見放すし…

世界は今日も廻っているし、戦争はなくならないし、泣いている子はこの瞬間にもいるし、死んで行く人もこの瞬間にもいる…

だけど、それと同じように、この瞬間に笑っている人もいるだろう、この瞬間に生まれてくる命もあるだろう、幸せだと感じる人が居るだろう。

そして―私には愛しいと思える人がいる。

それだけで良いのではないだろうか？

そう思える。

だって、今私を包み込んでくれているこの体温に嘘はない。

死んでしまったら全てがなくなる…

それを私は知っているから…

そして、それは突然来て、何も出来なかった自分の心を深い闇に陥れることも…

だから、今こうして会えるときに言わないといけない。

ただ二文字の思いを―

好きだと言うことを―

だけど、怖い…

だって、そのたった二文字の言葉で全てがなくなるかもしれない。

この関係がなかったことになるかも…

「ごめん」 たったその一言で、この関係が崩れてしまうかもしれない…

多分、私は今レイストが居なくなったら…

そう思うと好きなんて言えない。

伝えられない想い。

積もって、積もって… 溢れ出して… だけど怖くて伝えられないんだ。

変わってしまうこと。

それが一番怖い。

「ねえ、怜ちゃん。俺の昔話に少し付き合ってくれる?」

いきなりレイストがそう言ってきた。

私は黙って頷いた。

そして、レイストは私を抱きしめたまま話し始めた。

第十話 溢れる想いは…（後書き）

はい、やっと終わりましたよ。

今回凄く短いのにかなり時間がかかりました。

前回に次は早くとか書いておきながら結局遅くなってしまいスイマセン。

なんと言つか…

今回は、怜の想いを凄くストレートに書きました。

自分に当てはまる所を少し書いたので少し…はい、なんか…怜が自分に似てきてしまったかも…

でも、まあ良いかと思って投稿しました。

今はもう夏休みなので沢山更新して行けたら良いなと思います。

此処まで読んでくださりありがとうございました。

第十一話 レイスト

怜ちゃんは、怯えながら俺に全てを話してくれた。

信用してもらえてるのかな？

そんなのただの思いこみかもしれない。

さっきの拒絶…それもあるから。

だけど、本当に嬉しかった。

だから、今度は俺の番。

俺は怜ちゃんに包み隠さず伝えるよ。

俺の…過去を―

「俺はさ…この容姿じゃん？髪が銀だし…瞳だつて青だし…。
けど、そのせいかな…俺親に捨てられてさ。此処のマスターに拾われ
たんだ。」

俺はそう言つて目を閉じた。

目を閉じるとそこには闇が広がっていて…

何もない、そう。なにも…

「俺が捨てられたのは、ダンボールの中に入れられて、出来たばかりのこのバーの前。ダンボールの蓋は閉められて、間違えられて捨てられるところだったらしいぜ。」

自分で言うのもなんだけど、捨てられるところだったって…

俺は犬や猫より扱い下なんだな。

普通の犬や猫捨てるのでも蓋はしねえよな。

「な、それだけ思うと俺ってよっぽど嫌われてたんだなーって、でもまあかなり他人事なんだよな…まだ物心もついてない赤ん坊だったし。」

俺がそう言って笑うと、静かな部屋に俺の笑う声だけが響いた。

だけど…本当は…笑ってなんていられないほど余裕はない。

本当は、胸が苦しくて今にも泣き出しそうだった…だけど、好きな子の前でなんか泣きたくないから俺は必死に涙を堪えた。

親の顔なんて知らないし、親に捨てられるし、それだけで結構不幸なことだと思う。

だけど、現実はそのままで綺麗じゃない。

これだけで全てが解決するはずもなく、悪夢は続いた。

「見かけがもつと日本人っぽかったら良かったんだけどな…やっぱ違うからさ小学生の時と中学生の時にやっぱり差別された。友達は何もなかったんだけどさ…教師とか保護者とかさ…。やっぱ身元もわからねえし、こんなんだし…。」

俺がそう言つと、怜チャンが俺の方を見て少し驚いたように目を見開いた。

だけど、すぐに穏やかな笑顔を見せて

「…辛かったんだね。レイスト。」

そう言つて怜チャンが俺の頬に触れた。

そのときやつと気が付いた、自分が泣いていたことに。

「もう、我慢しなくて良いよ、泣いて良いよ。」

そう言つて今度は怜チャンが華奢な体で俺を抱きしめた。

瞳を閉じるとそこには闇が広がっている。

その闇はきつと俺の記憶にないだけで、小さいときのダンボールの中と同じなのだろう。

陽も当たらない、下手をすれば捨てられる。

そんな状況の中、俺を見つけて、此処まで育ててくれた人が居る。

そして、こんな俺を黙って受け止めてくれる愛しい人が居る。

それだけできつと俺は幸せなんだと思う。

確かに辛いことも沢山あった。

だけど、ソレを乗り越えて今此処にいて幸せだと思えるんだ。

好きだよ…怜ちゃん好き…

だけど、もう少しだけ待ってて。

俺が胸を張って君を好きだと言える日まで。

それまで…俺が守るから。

そうして俺は怜ちゃんを優しく抱きしめて静かに泣いた。

ずっと辛かった。

理解ある友達が多かったけど、確かに差別する奴も居て…

だけど、心配をかけたくなかったから父さんには言わなかった。

小さいときはずっと、父さんが本当の父さんだと思ってて、母さんについて聞いたときに

「お前は捨て子だったんだ」つと真実を聞かされた時、全てが信じられなくなつた時もあった。

見たこともない両親を恨み、呪つたこともあった。

だけど、今はもう全てを許せる。

怜チャンが居てくれて、父さんが居てくれて…

それだけで良いと思う。

幸せなんてそんなものなんだ。

だけど…あと一つだけ望むのは…

怜チャンにこの想いを伝えたいってことぐらいかな。

怜チャン…いつか絶対この想いを伝えるから…

俺は密かにそう胸に誓って、さっきよりも強く、怜チャンを抱きし

めた。

第十一話 レイスト（後書き）

結局かなり時間を空けてた気が…

まあ、良いか。

最近また他のHPで小説書き始めたのでこっちがおろそかになりやすいですね。

ってか、最近一話が凄く短い気が…

…すみません。

そろそろこの作品を簡潔させてやろうかと思っている今日この頃。

でも、やっぱり此処まで読んで下さる方も少ないながら居て下さるので検討中。

短編は書いていきたいなーなんて思います。

でも、ファンタジーを書いたことがない…って言うか最後まで辿り着いたことが無いので書きたいな…なんて。

まあ、その前にこの作品を簡潔させないとダメなんですけど。

レイストと怜のこの先はすでに頭の中では終わったかんじなので、さっさと今度こそは更新したいです。

此処まで読んで下さりありがとうございました。

第十二話 友情

もし、アナタに出会えなかったら

きっと今もまだ、何も見つけれずにただ生きていたと思う。

だけど、今はもう違う。

過去の私じゃない。

愛しい人を亡くして、失うことを恐れて耳を塞いだ私じゃない。

愛しい人を亡くして流した涙の分だけ、愛しいアナタが好きだったから…

それは、悲しみなんかと呼ぶ感情とは違う。

それは好きのバロメーターなんだ。

だけど、今のアナタへの気持ちはきつとバロメーターじゃ表しきれない。

それほどアナタを愛してる。

あの日から、私は何も変わらない生活を送っている。

好きと自覚して、ああ〜何してるのかな…っとか

もう、寝たかな？とか考えたりはする時間が増えたけど、会わない。

それは会いに行けば良いのだけど、好きな人にそんなことを出来るほど出来た人間じゃない私。

会えない時間と比例して、ため息の回数も増えた。

……どうして素直になれないんだろう？

そんな自分かもしかして、自分で頭を叩いた。

会いたいなら会いに行けばいい。

どうしてこんなに単純なことが出来ないんだ？

好きとか想いを伝えるワケじゃないけど、どうしてもドキドキするんだ？

それは、押さえようもないくらいにアナタが好きだから。

単純な方程式だ。

だけど、それを素直に認められない私は

ずっと、ずっと、言い訳を探してる。

きつと何も用がないのに言ったら

「なにしに来たの？」

つと彼は意地悪な質問をするだろうから…

まあ、“last show”に行ったら

「家具を買いに来た」

つとはつきり言えば良いことだが、そこは何とか

嘘をつかない性格の私には言えないことで

今ほどこんな性格の自分を恨んだことはないだろう

会いたい…会いたいな…レイストに

そう、彼も会いたいなんて思っているなんて気づきもせずに

独りで言い訳を探してる。

考え初めて早3時間。

もう、開き直りつつある思考回路に軽く苛つく。

告白しちゃえば良いと、心の中の誰かが囁く。

出来たら苦労は無いんだ。

だけど、臆病な私には告白なんて大それたコトは出来ない。

だって保証はないのだから。

人の心が見えたら良いのに。

そうしたら、レイストがどう思っているのか分かるのに。

本気でそう思う。

はあ… 今時の子は好きな人にアピールしているのだろうか？

それが疑問で仕方ない。

高校生とかどうしてるんだろう……

まあ、私も元は高校生だったのだが。

恋沙汰に興味のない人間だったのでそう言う話はしていないのだ。

その時、今時の高校生と言うフレーズで友達に会うことを考えた。

昔は、友達に会ったら両親のことを思い出すと言って会おうとしていなかったけど…

今なら会える…

私はそう思い、机の引き出しに封印していた携帯を取り出した。

連絡が来ていても無視して、もうあの街の人と交わるつもりもなかった。

だけど、今その封印は解放されあの頃重宝していた携帯が私の手の中にある。

久々に電源を付けると、沢山のメールが来ていた。

内容は大丈夫？とかありふれたものなんかじゃなくて

力になって上げられなくてごめんとか、もっと一緒に居たかったけど…コレからも頑張れとか凄く温かい言葉だった。

その言葉は私の胸を温かくする。

ありがとう。

今気が付いた。

私の友達には沢山良い人が居た。

そう…気付かなかったんだ、荒んでいた頃の私は。

見落としてた。

大切な人は家族以外でもいっぱいいることに…

今更ながら自分の浅はかさに恥ずかしくなる。

どうしてあの頃は何も見えてなかったんだろう。

私は、当時親友だった優衣に電話をかけた。

すると、ワンコールで優衣が電話に出た。

「ちょー！怜？」

大きくいきなりそう言われ、耳から受話器を遠ざける。

私は、少し呆れて、だけどすぐに電話に出てくれた何時もと変わらない声の優衣に感謝した。

「何。」

素っ気なくそう言うと、優衣は冷静さを取り戻したのか

「何って…アンタ何処に行くかも言わないで…メールも電話も返事ないし…」

そこまで言つと、優衣の声は語尾に行くに連れ震えていて…

心配をかけたなっと少しの罪悪感が胸を締め付ける。

「ごめん。」

私がそう言つと

「良いよ…でも、頼って貰いたかった。アンタは何時でも独りで抱え込み過ぎなんだよ。」

優衣はため息をつきながら優しくそう言ってくれた。

こんな友人、滅多に会えるモノではないと思う。

そう思うと、優衣の親友と言えるポジションを誇らしく思えた。

「で、本題は？」

優衣が少し優しくそう言った。

「会って話がしたいんだ。」

私がそう言つと

「良いよーじゃ、何時も通りのファミレス来れる？」

「ん、分かった。」

優衣の質問にそう返事をする

「じゃ、明日の日曜日。午後2時から。」

優衣がそう言ったのに「分かった。」っと頷き、そこで私達の会話は終わった。

明日優衣に会える。

そして、話をしよう。

今までのコトを――

第十二話 友情（後書き）

…すみません。

一ヶ月以上更新していませんでした。

バカですね、はい。

申し訳ないです……

夏休みだったのに……

しかも、結局悩んだ末に少し話を長引かせます。

結局かよって突っ込みもあるかもですが…バカなので許して下さいませ。

コレからもユルユル書いていきます。

頑張ります。

最近、変態化が進んでまともな小説が書けません。

このままでは怜チャンが、レイストが汚れてしまっっ

全力で脳内の汚れた部分を抹殺して頑張ります。

もう少しだけ、気ままに書く糞小説にお付き合います。

此処まで読んで下さいましてありがとうございます。

ゴールまで頑張ります。

第十三話 決意

約束通りの何時も通りのファミレスに午後2時。

その台詞だけで、昔に戻ったような気さえした。

そして今、何時ものファミレスに居て時刻は午後1時55分。

優奈は変わっていないだろうか。

そう思うと胸が少しだけ、高鳴って変の緊張してきた。

時計を見ては、窓の外を見て…端から見たら不審だろう。

その時

「いらつしゃいませ。」

店員の高い声が、空いている店内に響いた。

その声に反応してカウンターの方を振り返ると、そこには昔と変わらない優奈が居た。

私に気が付いたようで、こっちに歩いてきた。

優奈は可愛い小さい子、だけど性格は強気でお姉さんな感じ。

変わっていないかった。

可愛いところも、小さいところも

お姉さんみたいな所も…

「怜ー久し振りー。」

私が座っている向かい側の席に着き、ニツコリ微笑み手を組んで顎をのせた。

その笑みに黒き影が見えるのは気のせいだと是非とも思いたい。

「で？今まで何処でどんなことしてたのかしら？この不良娘は。」

顎を手にしたまま、可愛く首を傾げる。

黒い笑みを貼り付けたまま…

その笑みに私もつられて笑う。

笑ってないとやってられないのだ、この空間では。

私は小さく…イヤ大きな深いため息をつき、過去のことを話し始めた。

話が終わると、優奈はうんうんっと頷いた。

何に対して頷いたのかは知らないけど。

「で？今日はそのレイストって人のコトで話をしに来たわけね。」

私が小さく頷くと優奈は少し黒い笑みを見せて

注文してすっかり冷めてしまった珈琲を啜った。

相変わらず猫舌のようで。

「そう、じゃあ直球で行きなさい。」

優奈はハッキリとそう言って、人差し指を私に向けた。

人に指を向けるな、指を…

って…直球？

「っと…直球と言うと？」

私が少し困惑しながら小さく聞くと、優奈は少し眉をつり上げ

「好きです！！って言う直球。」

優奈はシレッとそう言ってのけた。

「好きです…」っとレイストに言っている自分を想像してみる。

レイストは啞然として、頭をかきながら困ったように眉に皺が寄っていた。

そして、「ごめん…」っただけ呟いて私に背を向けて他の女の所に行ってしまった。

そうだ、私ってレイストのこと…何も知らない。

知らないのに恋をして…

好きってことで頭が一杯になりすぎてそんな所まで気が回らなかった。

なんか私…最低だ。

レイストにはレイストの世界があつて、もしかしたらその世界で好きな人を見つけたのかもしれない。

そしたら私の入る隙なんて全然無くて…

だったら…もし、そうだったとしたら思いを伝えなくても良い…

私の世界は…レイストが居ないと成り立たないから。

依存しすぎてはダメ

馴れ合ってはダメ

そう想ってたのは…失うのが怖かったから。

だから、この町を離れたのに…

私はまたそれを繰り返すの？

だけど、自分から夢を壊すような…

そんなことをする勇気なんて

「い…怜!」

バコーン

頭に突然衝撃があって反射的に頭を抱え込むと、正面には優奈が居た。

「アンタまだあの悪いくせ直ってなかったのね。」

優奈は呆れたようにそう言って、ため息をついた。

そう、私には考えすぎる所と友達によると、意識が一時的に吹っ飛ぶ時があるらしい。

私は無意識だけど。

優奈は暫くジーツと私を見て

「…怜が何考えてるかは分からないけど…怜には私が居るでしょ？抱え込むな!!」

つと優奈は優しく微笑んだ。

優奈には何時だって見透かされてばかりだ。

それで助けてくれる。

頼りになる友達…

まあ、優奈は自称私のお母さんらしいけど。

「うん、…分かってる。だけど、今回は私自分で決着付けるよ。」
優奈にそう言っただけで笑いかけると優奈は頷いて

「あんたなら大丈夫だよ。なんたって私の娘なんだから。」

っと言っただけで席を立って「じゃ、発展あったら電話よろしくー」って店を出て行った。

娘になった覚えはないけど…ありがとうね。

私は胸の内でそう呟き、店を後にした。

レイスト、私はレイストの世界は知らない。

だけど…だけど決めたよ。

例え、この世界がまた闇に閉ざされたとしても…何度だって立ち上がってみせる。

その強さは、レイストがくれたんだよ？

だから……レイストにこの想いを伝える。

どんな結果になっても……私は後悔なんてしない。

第十三話 決意（後書き）

やっとこさ書きましたー

尊敬して止まない作者さんの小説を徹夜で読み、感動のあまり勢いで書きました。

ああー感動でしたーって後書き欄だった此処…

すいません、遅れに遅れやっとこさ書きましたよ
ない脳みそを捻って頑張りました。

つと言つと…

もう…良いですか？って感じまで捻りましたよ。
最近なんか脳みそが色々な所に吹っ飛んで（いろんな意味で）死ぬかと思いました。

はいはい、それで頑張りました。

無駄に後半部とか…

そんなこんなですいません。

此処まで読んだ下さってありがとうございます。

本当に本当にありがとうございます。

次回作も頑張りますので読んだ下さると嬉しいです。

第十四話 伝えたいのに

怜チャンと最後に会ったのは一週間前。

あの事件以来会っていない。

でも、俺的には勝手にあの事件で少しは親しくなれるんじゃないかと期待してた。

だけどダメだったみたいだ。

最近そんな自分の考えの甘さに軽く苛々している。

だけど、勇気が無くて動き出せないでいる。

会いたい

だけどどうすれば良いんだよ。

怜チャンの家に行く都合の良い理由なんて思いつかない。

どうすればこの胸のモヤモヤを吹き飛ばせるのか

どうすれば良いのかは分かってるんだけど…

そこに辿り着くまでの手段が分からない。

ああーなんかゲームで姫助け出してみたいな、そんな感じで誰か道を

示してくれないものだろうか。

そしたら、それに従って…どんな無理難題でも絶対成し遂げて

姫も、姫の心もゲット出来るのに…

なんて都合の良い空想が実現するワケもない。

そう思うと口からため息が出た。

怜チャンが来てくれればそれで良いのに。

最近の俺は結構重傷で、朝店に来るときだって今日は来てくれるんじゃないかと期待してる自分が居て、その分来てくれないと帰りは足が鉛のように重い。

そこまではまってる…だけど俺は怜チャンのことはなにも知らない。

高校生くらいの女の子が一人で生活している。

それは、ぜったい何か理由が有る。

だけど、その理由を聞く権利は俺にはないし

言う権利も怜チャンにしかない。

なぜかそれが疎外感を産む。

所詮他人…か…。

まあ、他人から昇格する方法は俺だって知ってる。

告白して、OKもらって恋人になるだけだ。

イヤ…これだとまだ他人だけでも…

少なくとも今よりは干涉できるし、何時でも怜チャンに会う理由が出来る。

まあ、そのポジションに行くには「好き」と言えば良いわけで…

だけど、その言葉を言うのも難しいのだ。

「はあ…」

本日二度目のため息が出る。

なんでこんなに悩む前に行動に出れないんだ俺…

マジで小さいな。

そう思う。

だけど、本当は一刻も早く想いを伝えたい。

想いを伝えて、OKを貰って、怜チャンを抱きしめて安心させて上げたい。

好きだって伝えたい…

そう想ってるのに

拒絶されるのが怖くて動き出せない。

拒絶されたら、本当に関係はそれまでになる。

下手したら、怜チャンはもっと遠くに行ってしまうかも知れない。

そんなのは耐えられない。

怜チャンの気持ちが分かれば良いのにとかそんな空想を想っていて
も仕方ないのは分かっている。

「怜チャン…」

誰も居ない店内でそう呟いてみる。

広く埃臭い店内に虚しくその声は響き、反響して空虚に消えていった。

その時、カウンターの正面に位置する重々しいドアについた錆びた
ベルが鳴った。

視線を投げかけると、そこには怜チャンが立っていた。

第十四話 伝えたいのに（後書き）

今回は結構早めの更新となりました。

そろそろこの話も終わりかなーっと思っておりますです。

最近脳内では新しい小説のストーリーを構成していますよ。
予定では初のファンタジーものです。

最近この作品も最近急激に読者数が増えて下さって…

ありがとうございます。

世間はもうすっかり秋ですねー

また近いうちに更新できれば良いです…

此処まで読んで下さってありがとうございますー

第十五話 幸せだと思う

想いを伝えようとおもいたった…

想いを伝えるなら、もっと考えてからの方が良かった。

だけど、気が付いたら、ファミレスから走って急いで帰ってレイストの居る“last show”に向かっている自分が居た。

会いたって、心から思ったから…

心も、体も、レイストに会いたって叫んでるから…

街の風景がどんどん後ろに飛んでいくような、そんな錯覚に襲われる。

暫く駅から全力疾走して、そのままの勢いで“last show”に来てしまった。

ドアの前まで来ると、足が止まった。

なんて言うのかとか、そんなことを今更考える。

だけど、今更考えても多分途中で怖くなって逃げてしまっ…

私は息だけを整理すると、重々しいドアに手をかけた。

何度か開けたこのドアはまったく知らないモノに感じる。

此処をくぐったら何が待っているのか…

少し不安になった。

逃げ出したい衝動に駆られる。

だけど、逃げないって決めた…想いを伝えるって、何があっても後悔しないって決めた。

私は自分の持っている少しばかりの勇気を振り絞ってドアを開けた。

そこには、何時もと変わらない“last show”の風景と、愛しい人の姿があった。

レイストは少し驚いたような顔をしたあと戸惑いがちに

「いらっしやい、怜ちゃん」

っと小さく微笑んで言った。

…… 此処からどうすれば良いのか。

そう思っ、ドアの前で立ち止まる。

さっきまでの勢いは何処へ行ったのか、怖くて足が竦む。

入り口に立ったまま動けない。

そんな私をレイストは不思議そうに見て

「怜ちゃん？早く入っておいでよ。」

つと私を呼ぶ。

……そう言われると、自然と足が動いた。

いつからこの足は私の言うことは聞かないのに、レイストの言うことは聞くようになったのだろうか。

「今日はどうしたの？」

つとレイストがさっきの戸惑った顔が嘘のように笑った。

その笑顔に胸が高鳴る。

もしかしたら、私の心臓の音が聞こえているかも知れない。

それほどまでに心臓の鼓動は大きく、早かった。

「…今日は…大切な話があるの。」

羞恥心と不安で、声は小さくなってしまったけど

やっとそこまで言えたことに安堵した。

まあ、まだスタート地点に立っている程度だ。

「ああー、うん。何？」

レイストは、多分笑顔でそう言っているのだろうが…

笑えてないよ

不安なんだね、レイストも。

だけど、伝えるよ？

レイストは望んでない結論かもしれない

…そうだとしても私は伝えるよ。

「…わ、私…」

私がやっとの想いで言葉を紡ぎ出したとき、レイストは凄い勢いで顔を逸らした。

その瞬間に、告白の羞恥心も、不安も全部吹き飛んだ。

私が頑張っている時に…コイツは何を顔を逸らしてるんだ。

分かるよ？不安なもの。

だけど…男なんだからそこはドツシリ構えとけ！！

…まあ、不安なのはお互い様。

私だって…結果が分からない以上怖い。

だけど、逃げていたって答えでないんだよ。

「聞いて、レイスト。」

そんなコトを思っていると、すでに体は動いていて

レイストの頬を手で包み込み無理矢理こっちを向かせていた。

「…私は…私は…」

此処まで来たら決意を固めて言ってしまうしかないと思った。

引き返せない。

だけど、後悔はしない。

そう、決めたから―

「私は…レイストのことが好きなの…」

言い終わって、レイストを見ると驚いたように目を見開いて穴があ

くぐらい私を見つめていた。

だけど、すぐにレイストは私を抱きしめてくれた。

「…俺も…俺も好きだよ。怜ちゃん」

顔は見えなかったけど、確かにレイストはそう言ってくれた。

ダメだと思ってた

その分、凄く嬉しくて確かめるようにレイストを抱き返した。

「ねえ、コレ夢じゃないよね？」

レイストがさっきより強く私を抱きしめてそう言った。

「分かんない」

こんなやりとりが楽しくて、嬉しくて自然と笑みがこぼれる。

すると、レイストが体を離して

「じゃ、ちょっと俺のほっぺ抓って。」

っとほつぺたを指さして言った。

「ん」

そう言つて、思いっきりレイストの頬を抓つてやった。

夢じゃないことを確認させてあげる為に。

レイストは凄く痛がつて、眉間に皺が寄っていた。

すぐに手を離すと、レイストの肌にくつきり赤い跡が残っていたけどそこは黙っておく。

「ねえ、怜チャン。コレ夢じゃないみたいなんだけど？」

レイストがほつぺをさすりながら、だけど笑顔でそう言う。

そりゃあ、夢だったらこちつが困る。

神様に慰謝料請求ものだぞ。

「そつか…よかった。」

そう言う時、多分今までで一番素直に笑えた。

もう、私には大切なモノを作ることとは出来ないと思つてた。

両親を失ったことで、世界が色を失ってそこから一生立ち直れない
と思ってた。

だけど、レイストに会って世界は色を取り戻した。

大切なモノと呼べるモノを見つけた。

失うのは怖いけど…

だけど、それはみんな一緒なんだと気付けた。

世界は不変ではいられないから…

そう、この世界では常に時間が流れていて不幸な人も泣いている人
も居る。

だけど…笑っている人も、幸せな人も居るんだって気付けた。

亡くなる人も居る。

だけど、生まれてくる命もある。

全ては循環してる。

そうだよ…悲しいことだけじゃない。

ほら、こうしてレイストに出会えてコトだって…父さんと母さんを

失わなかったらなかったから。

そう、世の中は偶然じゃない、必然。

今ならそう言える。

私多分、今…幸せだと思う。

第十五話 幸せだと思っ（後書き）

あれ？カレンダーが一ヶ月近く過ぎてるよ？

っと思っただのは私だけではないと思う。

みなさんすみません。

このバカ作者、またまた放置しておりました。

いや…その色々追われておりまして。

まあ、例えばテストとか、テストとか…テスト。

結果は伸びない一方です。

イヤ、この作品は…もうラストですね。普通。

しかも、本当はこの作品ね…レイストバージョンもあつたんですよ。

だって、レイスト君の気持ちも気になるじゃないですか。

まあ、途中で怜チャンが主人公だし…っと思つてやめました。

ちなみに、この作品は残すところあと一話で終わりの予定です。

何を書くかって？

それは次回のお楽しみですよー

まあ、残すところあと一話となりました、孤独な少女の日常。

そろそろ、停滞している新しい小説の方も手を出しつつ、最後のデザート感覚で最後の話を紡いで行けたらと思います。

それでは、ラストスパートまで頑張って駆け抜けますのでよろしく
お願いします。

此処まで読んで頂きまして誠にありがとうございました。

最終話 幸せ

バンッー

朝から爆発音で目を覚ますことが最近続いている。

朝ぐらい、もう少し穏やかに過ごせないものだろうか。

だが、そうはさせてはくれないのだ。

「ハア…。」

深いため息をつき、心地良いベッドから這い出た。

恐らく、あの音の原因が居るであろうキッチンへ重い足を引きずった。

キッチンへ向かうほど焦げ臭い匂いがしてくのだが…多分気のせいじゃない。

キッチンの入り口まで来て、のれんをくぐり中に入る。

中は、黒い煙が立ちこめ、焦げ臭い匂いが充満している。

何時も以上に酷い有様に暫く啞然としていると

「ゴホッ……ゴホッゴホッ」

つと黒い煙の中から咳をする奴。

その咳をしている奴は、私の恋人のレイスト。

料理が壊滅的に出来ないのにやろうとするバカ。

朝ご飯を食べたかつたら起こせばいいのに。

そう思いながら、取りあえず窓を開けて部屋の中を換気する。

黒い煙が外に逃げていって、だいぶ周りが見えるようになってきた。

そこでやっとレイストの姿をレンジの前で見つけた。

煙を吸い込んだのか、涙目で咳をしている。

まあ、…自業自得なのだが。

「レイスト…いい加減にしてよ。何台レンジを壊せば良いの?」

座り込んでいるレイストに視線を合わせてしゃがんでそう言うが、レイストは口をきかない。

私はゆっくり立ち上がり、コンロが使えることを確認してから

「目玉焼きで良い?」

とため息をつきながら訪ねた。

すると、レイストは小さく頷いた。

どうやら、まだ悲しんでいるようだ。

女々しい奴め…

冷蔵庫から卵を三個とベーコンを取り出して、フライパンに油をし
く。

片手で卵を割っていき、ベーコンと一緒に焼く。

こっちの方が光熱費が節約されてお得だ。

目玉焼きは半熟で、ベーコンはこんがりと焼く。

焼けたら、更に目玉焼きとベーコンを盛りつけて、レタスとブロッ
コリー、あとプチトマトをで即席のサラダをつけてできあがり。

朝とは、こんな感じでお手軽で、栄養がある程度採れるもので良い
と思うが。

朝から、こんなに労力を使う料理なら、始めから朝食を採らない方
が良い。

まあ…レイストは多分私のためにやってくれたんだろう。

そのくらい分かってる。

サラダと目玉焼きの皿をレイストの前に置く。

フォークとナイフも一緒に。あと、ドレッシングもね。

レイストがそれを見て、顔を歪めた。

きつと、どうして自分にはこんなふうにできないのかとか、そんなことを考えているんだろう。

「これから練習すればいいじゃん。」

私がそう言っただけで自分の分の目玉焼きにフォークをぶっさすと、レイストはキョトンとして

「何で考えてることが分かるの？」

つと不思議そうに言った。

分かるよ。

分かりやすいレイストの性格もあるけど…

何時だってレイストの気持ちを考えて、レイストの嬉しいと思うことをして上げたいから。

「さあ？」

私はそう言いながら目玉焼きを口に運んだ。

レイストは釈然としないみたいだ。

だけど、多分そろそろまあ良いかと思って目玉焼きを食べる頃。

ホラッ、目玉焼きを食べた。

私達の日常は今こんな感じ。

すごく幸せ。

あなたは今どうですか？

今の現状に満足出来てますか？

まあ、何はともあれ…

貴方に幸あれ…

最終話 幸せ（後書き）

はい、以上で怜とレイストの話は終わりです。

最後の話は結構楽しく書かせて頂きました。

話の舞台はイメージ的に半年後と言ったところです。

なんか、色々あったこの作品。

半年がかりで16話しか更新出来なかった淒くマイペースで更新させて頂いたお話です。

今現在書いているのは、ファンタジーなのですがこの作品とは全然異なる話ですので、こんな感じで淒くゆっくり時間が流れる感じの小説とは暫くさよならです。

そんなこんなで、こんな小説にお付き合い下さって読者様、本当にありがとうございました。

今までお付き合い頂けたことを大変嬉しく思います。

更新遅かったり、訳の分からない文だったと思いますが此処まで書けたのは皆様のおかげです。

それでは、また何時かお会いする日まで…

作者はユルユル生きていきます。

それでは…

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2991e/>

孤独な少女の日常

2010年10月14日23時35分発行